

徳川将軍のリーダーシップ

江戸幕府一五代の将軍たち

——徳川幕府のガバナンス考

第二話 五代綱吉は明君か暗君か？（後編）

飛島 章

吉備国際大学客員教授

将軍継嗣問題

綱吉治世の元禄7年（1694）、側用人の柳沢吉保にとつていちはん頭の痛い問題は将軍継嗣問題であった。3代家光が定めた武家諸法度では「末期養子」を禁じていたが、慶安事件（由井正雪の乱）をきっかけにこの禁が緩和され、「諸藩の藩主が50歳未満であれば、臨終のときに後嗣を決定してもよい」ことになっていた。

明けて元禄8年の元日には、綱吉はその50歳を迎えることとなる。将軍自らがこの禁を犯すことは厳に慎まな

ければならない。たったひとりの跡継ぎである徳松を病気で失つて既に11年を経過して、ついに男児をもうけることができなかったことから、綱吉には養子を迎えるしか術がなかった。綱吉の胸の内には長女の鶴姫が嫁いだ紀州和歌山藩主徳川綱教を養子にという思いがあった。

一方吉保は、次期将軍には綱吉の兄である綱重の嫡男、綱豊こそ相応しいと思っていた。しかし、綱吉はこの綱豊をきらっていた。綱豊は、自分が将軍職を継ぐときのもうひとつの選択肢であったことや、綱豊の生い立ちその

ものへの不審などがあつてのことである。その不審とは、兄の綱重が天樹院付きの召使い、お保良を孕ませて産み落とされたのが綱豊であつたからである。この子は甲府藩家老新見備中守の子として育てられたのであつたが、その後新見が当時の老中酒井忠清に願ひ出て、綱豊が綱重の子であることを公式に認知してもらつたという経緯があつた。その辺が綱吉には納得できな

桂昌院の叙任

同じ時期、将軍綱吉にとっては生母

桂昌院に従一位の官位を贈ることが最大の関心事であつた。これには代々朝廷との折衝役を務めてきた、譜代筆頭の井伊家（彦根藩35万石藩主）の働きが不可欠であつた。井伊掃部頭家は家康の時代から、将軍家の冠婚葬祭を取り仕切り、朝廷と西国の外様大名たちの動静を監視するなどの、幕府にとって最も重要な役割を担つてきていた。

側用人柳沢吉保と老中、そして大奥との下相談がようやく煮詰まつて、元禄10年6月綱吉の命により井伊直興が江戸に呼び寄せられた。直興は元禄13

年3月までの3年間、大老として桂昌院の叙任と将軍後継問題に注力することになる。直興が大老として江戸在勤中の元禄11年7月、吉保は寛永寺根本中堂造営の総奉行を務めた功により、近衛少将に任じられ、同時に大老格に昇進した。大老格というのは俸禄として大老並みであり、権限を伴うものではなかった。吉保は、直興の力を借りながら桂昌院の叙任の件を、また、桂昌院の力を借りながら将軍後継問題を、粘り強く各職との調整を取り進め、目論見通りの結果を得ることに成功した。そして、元禄14年には、吉保は松平の家号を許され綱吉の諱の一字を与えられて松平美濃守吉保と改めた。実はこの時期に、忠臣蔵で知られる松の廊下の刃傷事件（元禄14年3月）と赤穂浪士による吉良邸討入り事件（翌15年12月）が起きており、この事件でも吉保はもうひと働きするのであるが、紙幅の関係で割愛させていた

位権大納言に任じられた。家宣の西丸入りに伴って、桜田御殿家臣は幕臣に取り立てられた。その数は、お目見え以上に限っても780名に達したという。そして、吉保は甲府城主綱豊を将軍継嗣と定めたことの功勞により、15万石余を領する甲府宰相に任ぜられた。

江戸期の 大老

ここまで縷々、綱吉の治世で側用人が果たした役割を述べてきたが、もうひとつ見過ごしてはならない重要な変革が進行していた。それは大老職の役割の変化である。別表「江戸期大老職一覧」をご覧ください。江戸時代に大老職に就いた重臣のリストである。官位を含めた氏名と就任・退任の年月日、時の将軍名、さらに在職年数を記してある。13名がリストアップされているが、7番と9番の井伊直興は同一人による再任なので、実際は12名である。

江戸期歴代大老職一覧

番号	大老名(官名)	就任		退任		在職年数	摘要
		将軍	年月日	将軍	年月日		
1	酒井忠世(雅楽頭)	③家光	寛永 13.3.12	③家光	寛永 13.3.19	0	
2	土井利勝(大炊頭)	③家光	寛永 15.11.7	③家光	正保元 .7.10	6	A
3	酒井忠勝(讃岐守)	③家光	寛永 15.11.7	④家綱	明暦 2.5.26	18	A
4	酒井忠清(雅楽頭)	④家綱	寛文 6.3.26	⑤綱吉	延宝 8.12.9	14	B
5	井伊直澄(掃部頭)	④家綱	寛文 8.11.19	④家綱	延宝 4.1.3	8	B
6	堀田正俊(筑前守)	⑤綱吉	天和元 .12.12	⑤綱吉	貞享元 .8.28	3	
7	井伊直興(掃部頭)	⑤綱吉	元禄 10.6.13	⑤綱吉	元禄 13.3.2	3	
8	松平吉保(美濃守)	⑤綱吉	宝永 3.1.11	⑤綱吉	宝永 6.6.3	3	柳沢
9	井伊直興(掃部頭)	⑥家宣	宝永 8.2.13	⑦家継	正徳 4.2.13	3	
10	井伊直幸(掃部頭)	⑩家治	天明 4.11.28	⑪家斉	天明 7.9.11	3	
11	井伊直亮(掃部頭)	⑪家斉	天保 6.12.23	⑫家慶	天保 12.5.13	6	
12	井伊直弼(掃部頭)	⑬家定	安政 5.4.23	⑬家定	安政 7.3.30	2	
13	酒井忠績(雅楽頭)	⑭家茂	元治 2.2.1	⑭家茂	元治 2.11.5	9/12	

まず、2番と3番、4番と5番は、いずれも在職期間が長いこと、またそれぞれの在職期間に重なりがあること(AとBで表示)、その辺が初期の大老の特徴である。一方、7番以降の後半は就任時期が飛び飛びで、在任期間も3年程度と短くなって明らかな違いを見せている。4番の酒井忠清、6番の

堀田正俊、7番の井伊直興、そして8番の松平吉保即ち側用人から昇った柳沢保明であるが、この4人はすべて綱吉がらみで、先月と今月で詳細を記したとおりである。綱吉の治世で大老職の何かが変化し、9番以降につながって行く。そして、12番の井伊直弼まで井伊家の大老が続き、幕末の酒井忠績で終わる。この表から、何を読み取ることができるだろうか？

大老職の新たな役割

私は、綱吉が大老の役割を大きく変えたと考えている。そもそも大老職は、將軍直屬の助言者として、あるいは將軍の判断を支える機関である老中制にあつてその上位者として置かれたものである。しかし、4代家綱の治世で権勢を振るう大老、酒井忠清が現れ、そして自らの治世の始まりに任じた大老堀田正俊の言動に接して、綱吉は大老職が時として暴走することの危険性を直感したのであろう。大老職を廃止したいと綱吉は考えた。

大老職を存続するかどうかの幕閣たちの検討の中で、この問題の原因が、大老職そのものにあるのではなく、老中職を務める者の中から有能・有力な

人物が大老職に抜擢される仕組みにあることを見出したと私は考える。それゆえ解決策としては、老中から大老職を登用する道を閉ざすことであつた。また大老職の役割としては、老中職が担う通常の職務とは別のものを担当させることであつた。大老職の選任が必要となつた都度、限られた期間に必要な役割だけを果たしてもらふことである。自ずと結論は、家格が老中職よりも上であることから老中職には就くことのない、譜代筆頭の井伊家に要請することとなつた。そして、通常業務を超える將軍継嗣などの、特命事項を扱う役割とすること、奉職する期間も限

定することが条件であつた。

綱吉政治の評価

このように、綱吉の政治は同時代の幕臣や江戸の町人たちには、その強引さによつて評価の低いものであつたが、江戸時代全体を俯瞰してみると、異なつた視点からの評価が可能となるように思われる。文治政治、側用人などの將軍側近役の起用と財政改革への取り組み、大老の役割の変更など、綱吉が始めたこれらのことからは次の代に着実に引き継がれて行つた。そして、それは將軍による強いリーダーシップが無ければ成しえないことでもあつ



元禄時代の花見風景

た。綱吉政治のパワーが何代先の將軍にまで持続するのか、それを暫く迎つてみたいと思つ。

6代將軍家宣

綱吉は、永宝6年(1709)正月64歳にて没した。そして家宣の最初の仕事は、天下の悪法と評された生類憐みの令の廃止を宣言することであつた。側用人柳沢吉保もこれに同意した。同年5月に本丸御殿で將軍宣下の儀式が行われた後、將軍継嗣時代からの側用人間部詮房を老中格の本丸側用人として登用した。間部はこのとき、2万石を増増され5万石を領する上野国高崎城主となつた。そして、正徳2年に家宣が没して以降も次期將軍家継に仕え、正徳6年までの7年間、將軍を支えた。

就任3年目の夏、家宣は病を患つた。病床から間部詮房に対し、自らの死後の継承者について、幼い嫡男鍋松(4歳)か尾張藩主の吉通(24歳)のどちらにしたら良いかを問うた。間部は大老に任じられた井伊直興(この時、直該に改名)の指導を受けながら、配下の儒学者新井白石を加えて出した結論は「重臣たちが二派(鍋松派と尾張派)

に分かれて争い、天下が乱れることを避けることが何より肝要で、ここは迷うことなく若君鍋松に継がせるべき」となった。家宣は生前に將軍家の家督を鍋松に継がせることを決意し、10月に没した。

7代將軍家継

將軍家を相続した鍋松は、正三位権大納言に叙任されて家継と名のつた。翌正徳3年(1713)3月に元服し、4月將軍宣下が行われた。こうして、4歳の幼將軍が誕生したが、判断力の備わっていない將軍だけに、前代から引き続き務めている側用人間部の役割はますます重要となった。大老井伊直興は役目を終え翌年彦根に戻った。間部は御用方右筆の補佐をうけながら政治を進めたが、猿樂師出身の間部には荷が重すぎた所為か、目立った業績を残してはいない。

家宣・家継の治世では、むしろ老中に出番があったと思われる。老中制のもとでは、將軍のリーダーシップが失われたとしても、幕政は大きく停滞することなく維持された。正徳6年4月、家継は数え年8歳で没した。

紀州藩主徳川吉宗

徳川吉宗は、貞享元年(1684)10月に紀州藩2代藩主徳川光貞の4男として和歌山で生まれた。幼名は源六、諱は頼方と名乗った。元禄9年4月、13歳のとき將軍綱吉に初めて御目見え、同年12月には従四位下左近衛少将に叙任された。こののち何事もなければ一小大名として終わるはずであったが、宝永2年5月、三代目藩主の長兄綱教が没し、あとを継いだ次兄頼も同年9月に死去したため、思いがけず紀州和歌山55万5000石の藩主となった。ときに頼方22歳、従三位左近衛権中将に叙され、綱吉の一字をもらって吉宗と改めた。

吉宗は紀州藩主として、宝永2年から正徳6年までの12年間を藩財政の回



8代將軍吉宗

その將軍就任にあたり、側用人政治に反発する門閥譜代たちの支持によるところが大きかったため、就任当初の吉宗は側近よりも老中の側に重心を移す政治姿勢がとられた。享保と改元された同年8

復に全力を尽くした。これ以前から紀州藩では、度重なる江戸屋敷の焼失、將軍綱吉の娘鶴姫と綱教との婚礼、綱吉の藩邸への御成りなどに大金を費やし、財政難に陥っていた。しかも、吉宗が藩主を継いだ年には、綱教・光貞・頼職と大きな葬儀が続き、藩財政にさらに重い負担を加えた。吉宗は藩財政の再建に取り組み、支出の抑制と土地開発などによる収入増により、ようやく立て直しに成功することができた。

正徳6年(1716)4月、幼將軍家継が没すると、老中は後継將軍の選定に入った。6代家宣危篤の際、家宣は幼い次期將軍の後見として尾張藩主吉通の名を告げていたが、その吉通は3年前に没していたため、紀州藩の吉宗が將軍家を継ぐことになった。吉宗も綱吉や家宣と同じく外部から迎えられた養子將軍であるが、

月、將軍宣下の式が行われた。吉宗の將軍家相続にあたり、綱吉や家宣のときと同様に紀州藩士が幕臣に組み入れられた。しかし、前二代とは異なり吉宗は紀州徳川家を存続させたため、移った家臣は100人余りであった。

御用取次

吉宗はそれまでの側用人を廃止し、その代わりに旗本クラスの側衆のなかに「御用取次」を新設した。格式上は、側用人が老中格もしくは老中上座の大名であったのに対し、御用取次は諸大夫身分であるので、かなり格下げとなった。初代の御用取次に任命された小笠原胤次・有馬氏倫・加納久通の禄高は、当初それぞれ、25000石・13000石・10000石であったが、その後小笠原は享保2年に隠居、有馬と加納の2人は享保11年によくやく1万石の大名に昇進したにすぎなかった。吉宗の意図は、側用人制度そのものの廃止ではなく、同じ役割を格下の者にやらせることで、俸禄額を節約することにあったのであろう。

格式や禄高が低く抑えられることによって、有馬や加納が接触できる対象者の範囲が大きく広がることになっ

た。つまり、側用人は代を重ねるうちに格式が高くなり、將軍との取り次ぎ範圍が老中・若年寄りなどの幕閣に限定されてしまうのに対して、吉宗は取り次ぎ役を旗本に格下げしたことで、同じ旗本格の実務幕吏にも接触が可能となり、仕事の成果が上がることになったのである。この辺の手法は、吉宗が紀州藩主として藩政改革に腕をふるったときに身に付けたものと思われる。

幕府財政の逼迫

吉宗の幕政改革の中核部分は財政の再建であった。5代綱吉の頃から顕著になった幕府財政の窮乏は慢性化し、年ごとに逼迫の度を高めていた。それゆえ改革は、幕府直轄領の支配強化と勘定所の機構改革、貢租収納の増収策などが中心となった。まず、勘定奉行の配下で直轄領内において地域ごとの管理を担当する代官の配置替えと不良代官の処罰が行われた。また、綱吉・家宣・吉宗の旧家臣から幕臣に移った者たちの多くを勘定方へ組み込み、勘定所組織の拡充が図られた。

さらに、勘定奉行の下の勘定方が訴訟などを扱う公事方と、勝手方という

直轄領支配と財政運営に取り組む部門とに分けられた。それまで勘定奉行の上司である老中は、月番合議制で専任を置かない慣わしであったが、吉宗は勝手方老中として水野忠之や松平乗邑を任命し、月番制や老中合議制からはずして、財務関係の仕事に専念させたのであった。このことは、勝手方組織の拡充がほぼ完成し幕府の吏僚組織の真ん中に据えられたことを意味している。

享保の改革

吉宗による享保の改革が現実に立脚した政策を打ち出したことで、農村地域での代官所組織を柱として幕府の支配は強化され、幕府財政も一応の安定をみせるようになった。改革の全容に触れることは本論の主旨ではないので説明を省くが、吉宗が実施したいくつかの施策は、その後の幕府財政に大きな影響を及ぼす要因となった。

まず、享保7年に出された「上米の制」について、万石以上の諸大名に対して石高一万石につき100石のコメの上納を命じ、その代わりに参勤交代の江戸在府年限を半減するという制度である。上米総額は年間18万石以上

にのぼり、幕府の貢租収納量が一時的に15パーセント程度増加したのであるが、享保15年に制度は廃止された。諸大名にとり、在府期間の減少は経費の節減には繋がらず、ただ藩財政の負担が増えただけであったためである。

定免法の導入

つぎに、年貢増徴の施策として行われた、「検見法」から「定免法」への変更についてである。検見法は、毎年作高を検査して年貢高を決定するものであったが、手間がかかるうえに、稲の品種も増え商品作物の栽培も加わって、その実施が極めて難しくなっていた。定免法は過去数年間の収穫高の平均から年貢高を決定し、不作のとき以外は変更しないというもの。これは農民にとって有利だという理由で、従来の四公六民から五公五民への貢租率アップの交換条件とされたのであった。

定免法の採用によって、豊作のときや農業生産力の上昇によって農民の手に余剰生産物が残ることになり、その後農村における商業や手工業の展開を促進することになった。一方幕府としては、年貢米の徴収量が一時的に増加

したのであるが、その後頭打ちとなり、やがて下降線を辿っていくことになるのであった。

三卿の創設

さらにもうひとつ、吉宗が遺した問題のタネは、「三卿」の創設であった。吉宗自身が御三家のひとつ紀州徳川家の出身であったことから、それ以降の將軍は紀州徳川家所縁の者が將軍職を継ぐ形となり、吉宗の血を引く田安家、一橋家そして清水家の三家の中から選ばれることとなった。この三家を三卿と呼ぶが、御三家と三卿の違いは、御三家はそれぞれ尾張、紀州、水戸に領国をもっているが、三卿は固有の領国をもっていないことであった。すなわち、三卿が使用する土地と施設は幕府の財産であり、必要な経費はすべて幕府の財政から賄われていたのである。このことが、その後に登場する將軍たちの意識に、ある変化をもたらすことになるのであるが、いまは触れないでおきたい。

9代家重と10代家治

延享2年(1745)、吉宗は嫡男家重に將軍職を譲ったが、宝暦元年に



9代将軍家重

ランキングされたものを目にする
がある。初代家康は別格としても、8
代吉宗の名は家康のすぐ下か、その次
くらいには常に在る。上位の五指には
秀忠・家光・慶喜が必ず入るが、5代
綱吉はその下か、場合によっては10位
以下であり、綱吉の評価は決して高く
ない。

将軍に限らず為政者を評価する場
合、伝統的には個々の人物の能力や業
績、人となりを比較する手法が用いら
れる。その手法で将軍綱吉を組上にあ
げれば、たぶん減点項目が多くとも
合格点に達しないのであろう。しかし、
視点をずっと高くして時代を俯瞰する
ところから眺めてみると、綱吉の評価
は違ってくるのではないかとわたしは考
える。

徳川幕府が達成した「元和偃武」を

制度的に固めたのが家光であるなら、
綱吉の文治政治は儒教を基礎に置いた
精神革命によって、それを魂を吹き込
んだといえる。綱吉は、現代に通じる
「安心安全な世の中づくり」へ果敢に
踏み出した冒険家であった。余りにも
大胆なその発想を周囲の者たちはほと
んど理解できなかった。一方吉宗は、

幕閣や幕臣たちへの気遣いや心配りの
上手な将軍であった。これが吉宗に対
する従来の高評価に大きく反映してい
ると思う。現代と違って、マスコミや
世論調査がない時代であったから、同
時代の重臣たちや身の回りの者たちの
評価が、そのまま公式、非公式の記録
に遺された。平成の時代に入って古文
書の発掘や解説が進み、歴史上の出来
事の実関係がかなり明らかになった
今、歴史上の人物も評価し直す時機に
来ていると考える。

綱吉は人間としては未熟で、

「君子」とは程遠い。特に、将
軍になりたての時期は「暴君」
そのものである。しかし、2代
目側用人の柳沢吉保という補
佐役を得て、大きく成長したと
私は理解している。文治政治へ
の転換、側用人の起用、幕府勤



5代将軍綱吉

定方役人の拡充、大老職の役割変更な
ど、綱吉の治世で始まった制度や慣習
はいずれも代を超えて受け継がれてお
り、その政治にもっと高評価を与えて
もよいのではないか。それは綱吉個人
の能力とは言えないかもしれない。し
かし、側近や重臣など周りの者を本気
にさせる力、それを綱吉がもっていた
と考えるなら、それも将軍の力量であ
らう。言い換えれば「将軍マジック」
で人を動かす術、綱吉はこれを会得し
たのではないかと思うのである。

私には、綱吉の治政で播かれた種が、
吉宗の時代に丁度収穫期を迎えたよ
うに思われる。両者に優劣をつけるこ
との意味はないが、綱吉にはハンディ
キャップを与えても良いのではないかと
考えている。吉宗の評価は、その後
の政治の成り行きや幕閣たちの動きを
見極めてから下しても遅くはないであ
らう。

将軍綱吉は明君か暗君か、から始
まった第二話であるが、私は「綱吉は、
老中や側用人をはじめ将軍を取り巻く
多くの人たちに鍛えられて、歴代将軍
の中でも上位にランクされる名君と
なった」ということで結びたい。

(第2話終わり)

まとめ

——5代綱吉と8代吉宗の評価

江戸時代の15人の徳川将軍を評価し